周堤墓は明らかに存在する１～３号のほかに、２基（４・５号）の存在が推測されている。また、１→２号の構築順が推定されている。この遺跡の周堤墓は墓標（地上標識）、ベンガラ散布方法などが多様で副葬品も豊富であり、多くの分析・研究の対象となっている。竪穴内の墓壙に積石が多く行われていること、竪穴内だけでなく周堤上・周堤外にも墓壙が構築されていることなども特徴である。また、時期的には三ッ谷式に相当し（鷹野 1981・1989）、新しい段階の周堤墓と考えられる。

⑥芦別市野花南環状土籬

昭和28年、芦別郷土史研究会発見・調査。昭和29年、河野広道調査・復元。昭和42年測量調査。空知川左岸段丘に位置し、標高は約120mで、空知川との比高差は約16mである。昭和37年に市指定史跡となった。

外径21m、内径17mで周堤墓中央部を２㎡ほど調査したところ人頭大、それ以上の河原石20個が敷き詰められていたという。また、この北に隣接して中心部に配石のある直径11m程の円形の窪みが確認された（道埋文センター 1999）。

⑦斜里町朱円環状土籬

昭和23年、河野広道調査。オクシベツ川とアッカンベツ川にはさまれた丘陵裾に位置し、標高は15～16mである。昭和32年に出土遺物とともに道指定史跡となった。

Ａ号・Ｂ号とされた周堤頂部での径が28m・32mの周堤墓が、わずかの距離をおいて２個ならんでいる。Ａ号には20基以上の、Ｂ号には中央部に１基のストーンサークルが確認された。この内、７基？が調査され土器、石棒、石斧などの豊富な副葬品が出土した。このなかには３体以上の合葬墓やアッシ様織物が出土した火葬墓がある。

周堤の中に積石墓があること、副葬品、なかでも土器が多いことが特徴である。また、構築されたのは御殿山式（栗沢式）の時期であり、現在ある周堤墓のなかでは最も新しい。周堤墓から静内町御殿山墳墓群などに見られる積石墓へ移行している様子が伺える。

⑧標津町伊茶仁ふ化場第１遺跡

昭和38年、大場利夫踏査・発見。昭和53年、町教委試掘調査。伊茶仁川の支流間にはさまれた細長い段丘上に位置し、標高は約14m、川との比高差は３mである。

一部分の試掘調査で墓壙２基が検出された。いずれもベンガラが床面に散布されており、副葬品はなかった。内１基には動物の皮が敷かれていたという。周堤墓周辺から同時期の遺物は出土しなかったが、約60m東に遺物の分布が見られ生活跡と推測されている。

⑨標津町伊茶仁チシネ第３竪穴群遺跡

昭和59年、町教委分布調査。平成９年、町教委発掘調査。伊茶仁川と忠類川の間を流れる小河川右岸で比高差２m程の低い段丘上に位置し、標高は約９mである。

川に沿って周堤墓５基が並んでいる。平成９年には４号の一部を発掘、墓壙３基を確認し、内１基を調査した。墓壙内には墓標があり、ベンガラ・副葬品は確認されなかった（道教委文化課編 1998、椙田 1999予定）。

⑩標津町伊茶仁カリカリウス遺跡

平成６年、町教委測量調査。無名川第二地点で周堤墓１基、カリカリウス川第一地点で可能性のあるくぼみ２か所が発見された。カリカリウス遺跡は根釧原野東部に広がる海成段丘上に位置する。

無名川第二地点　ポー川支流の無名川の右岸段丘先端の緩斜面にあり標高は９～12mで川との比高差は６mほどである。標高９～10m付近に周堤墓１基がある。周辺には竪穴群が存在するが、周堤墓との関係は不明である。

カリカリウス川第一地点　ポー川上流にある支流のカリカリウス川の右岸段丘上にある。標高15～16m付近に直径10m程の円形竪穴が2か所あり、周堤墓の可能性も推定している。川との比高差は約10mほどである。

以上のように、現在確認されている周堤墓の分布は道央部の苫小牧市6基、千歳市45基、恵庭市5基で、内陸部の芦別市に1～2基、オホーツク海沿岸の斜里町に2基、標津町に7基となっている。

この合計66基の周堤墓の内、苫小牧市・千歳市・恵庭市の石狩低地帯で56基が存在し、全体の約85％を占めている。なかでも馬追丘陵西側を含めたキウス周辺に全体の約半数の32基が集中している（図Ⅵ－2・3参照）。

これは開発事業に伴う発掘調査が石狩低地帯周辺に集中していることにも起因するが、周堤墓を多く構築した時期に作られた堂林式土器を伴う遺跡の分布や土器の出土量、周堤墓が複数まとまる傾向などから、いまだに未発見のものを含めても今後とも石狩低地帯に集中する傾向は変わらないと思われる。

2　周堤墓と後期後葉の遺跡の分布

このように周堤墓の分布は偏りを見せ、今のところ道北地方、道東部太平洋側の十勝・釧路地方、後志地方も含む道南部では発見されていない。これは、周堤墓が構築された後期後葉の遺跡、なかでも主体となる堂林式土器を伴う遺跡の分布の濃淡と符号する。

道北部では後期中葉には大規模な遺跡が分布し（旭川市神居古潭7遺跡、礼文町船泊遺跡など）、同じ時期の配石を伴う墓も深川市音江環状列石（駒井 1959）、旭川市神居古潭ストーンサークル（河野ほか 1952、旭川市教委 1990）などで確認されている。ところが後期後葉になると堂林式土器が富良野市烏沼遺跡などで破片、芦別市野花南熊の沢遺跡でまとまって出土し、御殿山式に相当する土器が美深町ピウカ2遺跡で出土する（美深町教委 1999）程度で後期後葉の遺跡は少ない（杉浦 1991）。

道東部では、藤本によると中期末から後期前葉にかけての気候寒冷化が壊滅的な影響を与えたらしく、後期前葉には全くと言ってよいほど遺跡が見られなくなる（藤本 1979）。後期中葉では常呂町トコロチャシ南尾根、鶴居村下雪裡第2・4竪穴群などの遺跡が見られるものの今のところ小規模な遺跡が多く、後葉に至って堂林式～御殿山式土器が道東一円に広がる（沢 1978）。

そのような中で、釧路地方の後期後葉の遺跡は弟子屈町下鐺別遺跡など釧路湿原西縁台地、阿寒川・釧路川流域で確認されているが、仮小屋的性格の遺跡などの小規模なものが多い（沢 1987）。十勝地方でも鹿追町上然別1遺跡（十勝川流域史研究会ほか 1976）、十勝太若月遺跡や音更町（以上帯広市教委 1985）、芽室町（道埋文センター 1993）などで堂林式土器が確認されているが、多くは破片資料であり遺跡は少ない。次の御殿山式に相当する時期や晩期初頭では大規模な遺跡群も確認され再び定住性が回復すると考えられている（石橋・後藤・菅・佐藤 1980）。

なお、端野町一区4遺跡（北川遺跡）（加藤 1972）、根室市初田牛20遺跡（根室市教委 1989）、足寄町上利別20遺跡（足寄町教委 1990）では後期末葉から晩期初頭にかけての墓が確認されている。

道南では後期後葉の遺跡は各所に分布する。堂林式もしくはそれに相当する土器は青森県まで及んでいる。しかし、当該地域におけるこの時期の土器は突瘤文が顕著に認められず（新道4遺跡C地区Ⅳ群c類土器など　道埋文センター 1987）、むしろ東北地方の十腰内Ⅴ式に相当し（戸井町釜谷2遺跡など　戸井町教委 1988）、これに道央部の堂林式の影響が及んだと考えられる。この結果、堂林式の末から三ッ谷式に相当する時期に道南部へ突瘤文が広がり、青森県へも分布するようになると考え

られている（以上、大沼氏の御教示による）。むつ市大湊近川遺跡では北海道的な土器が出土し、三ッ谷式の時期に北海道からの集団的移住も考えられている（青森県教委 1987）。このように、堂林式土器が全道的に分布を広げるなかでも、道南部は東北地方とのつながりが大きい地域であった。特に函館市石倉貝塚（函館市教委 1999）、八雲町浜松５遺跡（八雲町教委 1995）など後期前半の大規模な配石遺構に見られるように、墓制もまた東北地方の影響が及んでいると考えられるのである。

今の所これらの地域に周堤墓の分布が見られないのはこのような状況を反映していると考えられる。但し、堂林式の末から三ッ谷式にかけての時期に堂林式の系譜を引く土器が青森まで分布を広げる状況から、今後道南部において周堤墓が発見される可能性は否定できない。

なお図Ⅵ－２に図示したように、後期中葉の特徴的な墓制である環状列石を初めとする配石遺構の分布は道南部、日本海沿岸の後志地方や道北部、石狩川流域の北部などに見られ、周堤墓の分布とは重複しない傾向がある。

3　周堤墓の立地と生業

周堤墓の立地は、河川に面した段丘上（美沢川流域の遺跡群・末広遺跡・柏木Ｂ遺跡・野花南環状土籬・標津町周堤墓群）、低地や低地にある湖沼などに面した丘陵裾（キウス周堤墓群・キウス４遺跡・朱円環状土籬？）や独立丘陵上（丸子山遺跡）に分類できる。河岸段丘上としたものも多くは丘陵先端部に位置する。標高はほとんどが20m以下で、川との比高差は20m以下である。また、河川の大きさは様々である。

後期中葉の環状列石などの墓は眺望の開けた小高い場所が一般的で（大谷 1975）、見上げるような小山や尾根上に位置するものが多い。このような立地は周堤墓とは大きく異なる。一方で美沢川流域の遺跡群や末広遺跡では周堤墓とほぼ同じ場所に、大量の遺物を伴って中葉の墓壙が多数分布している（図Ⅵ－４　美々４遺跡第１～６群など）。後期中葉では地域により墓壙の構造、墓域の立地が異なるようである。

周堤墓は後者と同じ立地だけではなく、更に低地にも分布する。このことから、後者と関連を有しつつも若干異なる墓域観念を持っていたと考えられる。

一般に、このような遺跡の立地はサケ・マスやシカなどの豊富な食料と関連付けて説明されることが多い。例えば、このような高い山の裾野に展開された段丘の平坦地を切り開いた川は伏流水も多く、サケ・マスの産卵溯上に好適な条件のととのった所と考えられている（沢 1987）。美沢川流域やキウス周辺も往時のサケ・マスの溯上、シカの通り道であることや捕獲施設の存在、鳥類生息の沼地に近いことなどが指摘されている（高橋・越田 1984、大谷 1978、大泰司 1997など）。内陸部に位置する野花南も空知川を登りつめた狭隘部であって河川漁業を中心とした生業の場として重要な地点であったと考えられている（芦別市教委 1987）。

このような地域での狩猟・漁撈は一時期に大量に捕獲するものが多く、捕獲施設の構築から捕獲・分配・加工にいたるまで統率された集団労働を必要とすると考えられる。このようななかでの協業や定住などが集団墓地を構築する背景となったことは既に多くの研究者により指摘されている（大塚 1964など）。

また、沢は伊茶仁ふ化場１遺跡の周堤墓について触れる中で交通の便の良い場所でもあるとも指摘している（沢 1987）。後述のように、キウス周辺も同じような傾向を有していると考えられるのである。

4　周堤墓の単位について

これまで、周堤墓の単位については複数（多くは２基）が１単位としてまとまるとする説（林 1979、木村英 1981、木村尚 1984）と、複数がまとまっているものでも同時並行ではないとする説（春成 1983、矢吹 1983・84）があった。

表Ⅵ－２によると周堤墓はほとんどが複数で隣接して確認されている。また、隣接していないものでも、美々５遺跡ＢＸ－１、美々４遺跡Ｘ－９、キウス周堤墓群６・７・13号、伊茶仁カリカリウス遺跡無名川第二地点では同一遺跡内かやや離れた地点に周堤墓が存在している。さらに、現在１基のみ存在する野花南環状土籬はもう１基が隣接している可能性がある（矢野 1998、道埋文センター 1999）。これを除くと、今の所１基のみ単独で存在すると考えられるのは伊茶仁ふ化場１遺跡だけである。

キウス４遺跡では構築時期にあまり差がないと考えられる、同じような規模・形態の周堤墓（Ⅵ－３参照）が近くに作られており、複数の周堤墓が同時存在していると推測される。特に、規模が小さく墓壙数が少ない周堤墓の段階では２基以上がまとまる傾向がある。

このことから、若干の時間差を有しつつも基本的には複数基が１単位となり隣接もしくは互いの墓域が眺められる程近接して作られ、ある一時期には同時存在して墓域として機能したと言える。

5　集落との関係

これまで周堤墓を作った人々の集落は必ずしも明確ではなかった。キウス４遺跡で見られたように周堤墓からやや離れた場所に、出入口があり、掘り込みが無いか浅い円形の住居を作っていたと考えられる。集落が判然としなかったのはこのような住居の形態に因るのであろう。美沢川流域の遺跡でも周堤墓の開口部の下で川に近い所に遺物集中域があり生活施設があったと考えられている（矢吹 1983・1984）。

この時期は後期中葉とは異なり、集落と墓域はより近接して作られており、周堤墓の特質の一つとして挙げられよう。

6　まとめ －キウス４遺跡の特色－

以上、周堤墓の分布・立地・構築単位などについて概観してきた。

周堤墓は石狩低地帯に多く、また丘陵裾で川や沼に面した所に位置しサケ・マスやシカ、鳥類などの食料に恵まれた地域であった。川との比高差があまりないことからも、特に河川漁撈との強いつながりが想定できる。これを裏付けるようにキウス４遺跡盛土遺構では大量のサケ科魚類の動物遺体が出土している。やや上流に位置するキウス５遺跡ではサケ科魚類の遺体は全く検出されず好対照をなしている（高橋 1998『キウス４遺跡（２）』）。

また、交通の便との関連も指摘されている。石狩低地帯は北海道南部と道北部の境界に位置することから、大場は千歳一帯が交易の場であったことを推測している（千歳市教委 1967）。また、美沢１遺跡では道南部、道東北部それぞれの特徴を有する縄文人が同じ周堤墓に葬られていた（百々・山口 1981）。

キウス４遺跡では道東部の黒曜石の原石や、東北地方で作られた土器が盛土遺構から出土している。また、キウス川に沿って濃密に遺跡が分布しており、湖沼に面していることからも交通・交易の一つの拠点であった可能性がある。

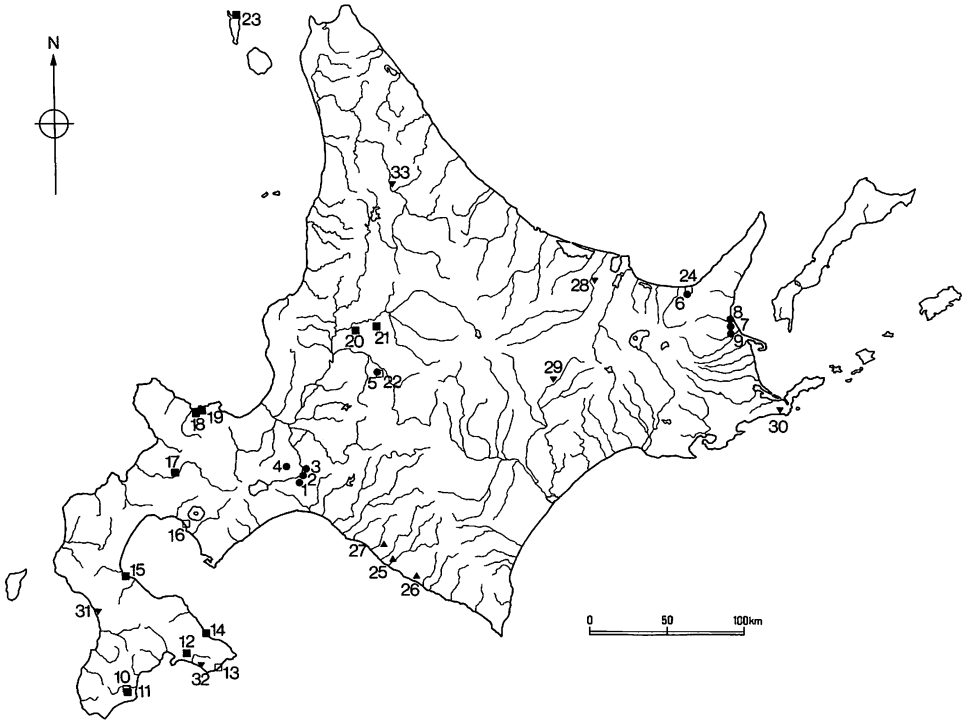
また、美沢川流域の遺跡群の一つである美々８遺跡は、時代は下るが18世紀に「ユーフツ越」「シ

コツ越」と呼ばれた日本海と太平洋を結ぶ交通の中継点であったし、内陸部にある野花南環状土籬も近接する滝里遺跡群の豊富な遺物量から、空知川を通じた内陸交通の拠点であったと考えられる。

このように、サケ・マスが溯上する河川に面した交通の要衝に多くの周堤墓が分布している。それはまた、そこを通過する他者に威信を見せる視覚的効果（春成 1983）も有していたのだろう。なかでもキウス４遺跡周辺は住居跡が近接した地点でまとまって検出され、また長期間に渡って人々が住む生産力に富んだ地域であり、縄文時代後期には突出した特別な位置を占めていたと考えられるのである。

なお、環状列石をはじめとする配石遺構は周堤墓と分布・立地が一致せず、住居跡との位置関係などからも周堤墓とは直接的に結びつかないと思われ、その系譜関係はより慎重に考える必要がある。

（藤原秀樹）



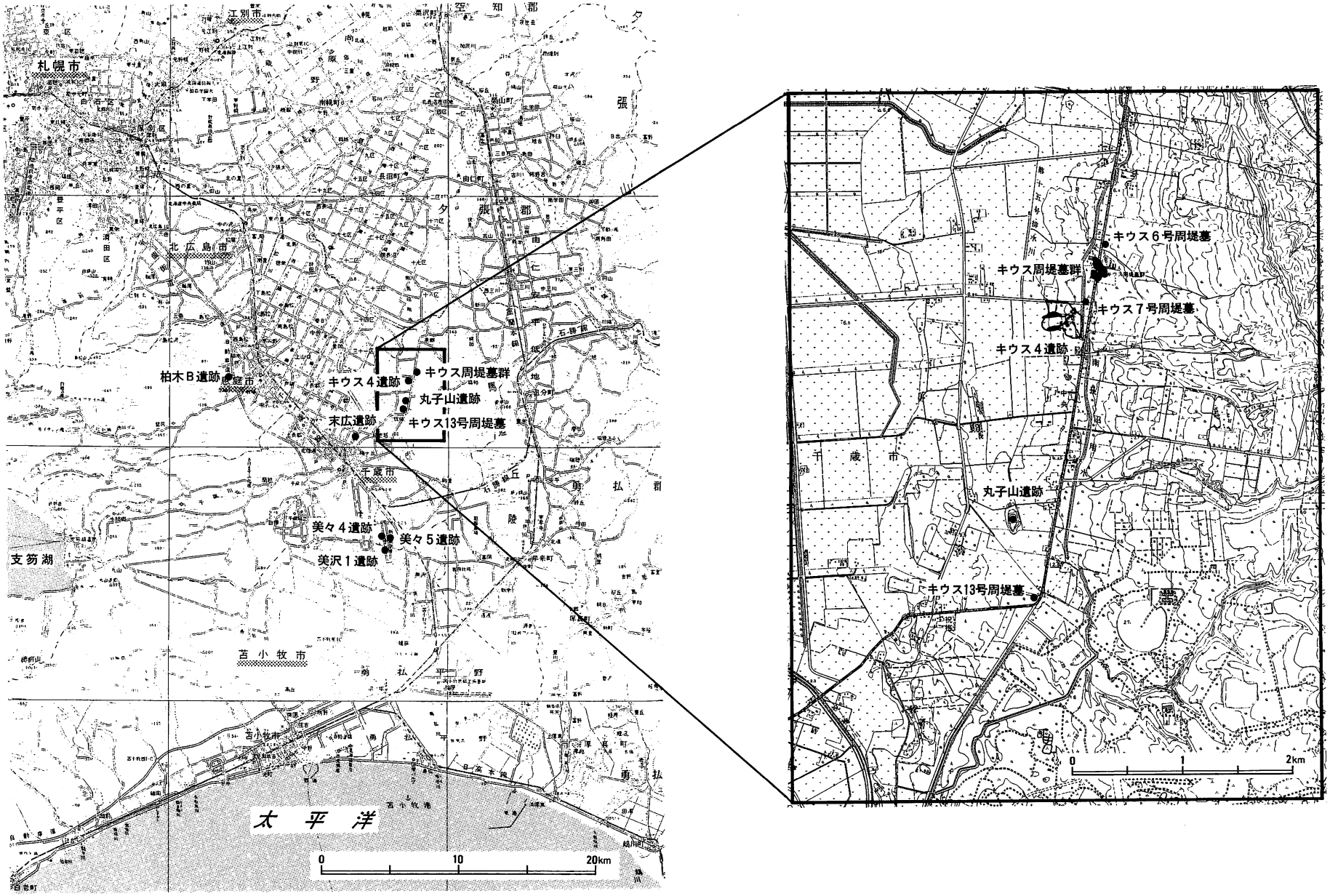
●	周堤墓	
1	美沢１遺跡	苫小牧市
	美々４遺跡	千歳市
	美々５遺跡	千歳市
2	末広遺跡	千歳市
3	丸子山遺跡	千歳市
	キウス周堤墓群	千歳市
	キウス４遺跡	千歳市
4	柏木Ｂ遺跡	恵庭市
5	野花南環状土籬	芦別市
6	朱円環状土籬	斜里町
7	伊茶仁ふ化場１遺跡	標津町
8	伊茶仁チシネ第３竪穴群遺跡	標津町
9	伊茶仁カリカリウス遺跡	標津町

■	配石遺構（環状列石主体）	
10	湯の里５遺跡	知内町
11	湯の里１遺跡	知内町
12	日吉遺跡	函館市
13	浜町Ａ遺跡	戸井町
14	臼尻Ａ遺跡	南茅部町
15	浜松２遺跡	八雲町
	浜松５遺跡	八雲町
16	高砂貝塚	虻田町
17	曽我（北栄）環状列石	ニセコ町
	曽我滝台遺跡（環状列石）	ニセコ町
18	八幡山遺跡	余市町
	西崎山ストーンサークル	余市町・小樽市
19	地鎮山巨石記念物	小樽市
	忍路環状列石	小樽市
20	音江環状列石	深川市
21	神居古潭ストーンサークル	旭川市
22	野花南熊の沢遺跡	芦別市
23	船泊遺跡	礼文町
24	オクシベツ川遺跡	斜里町

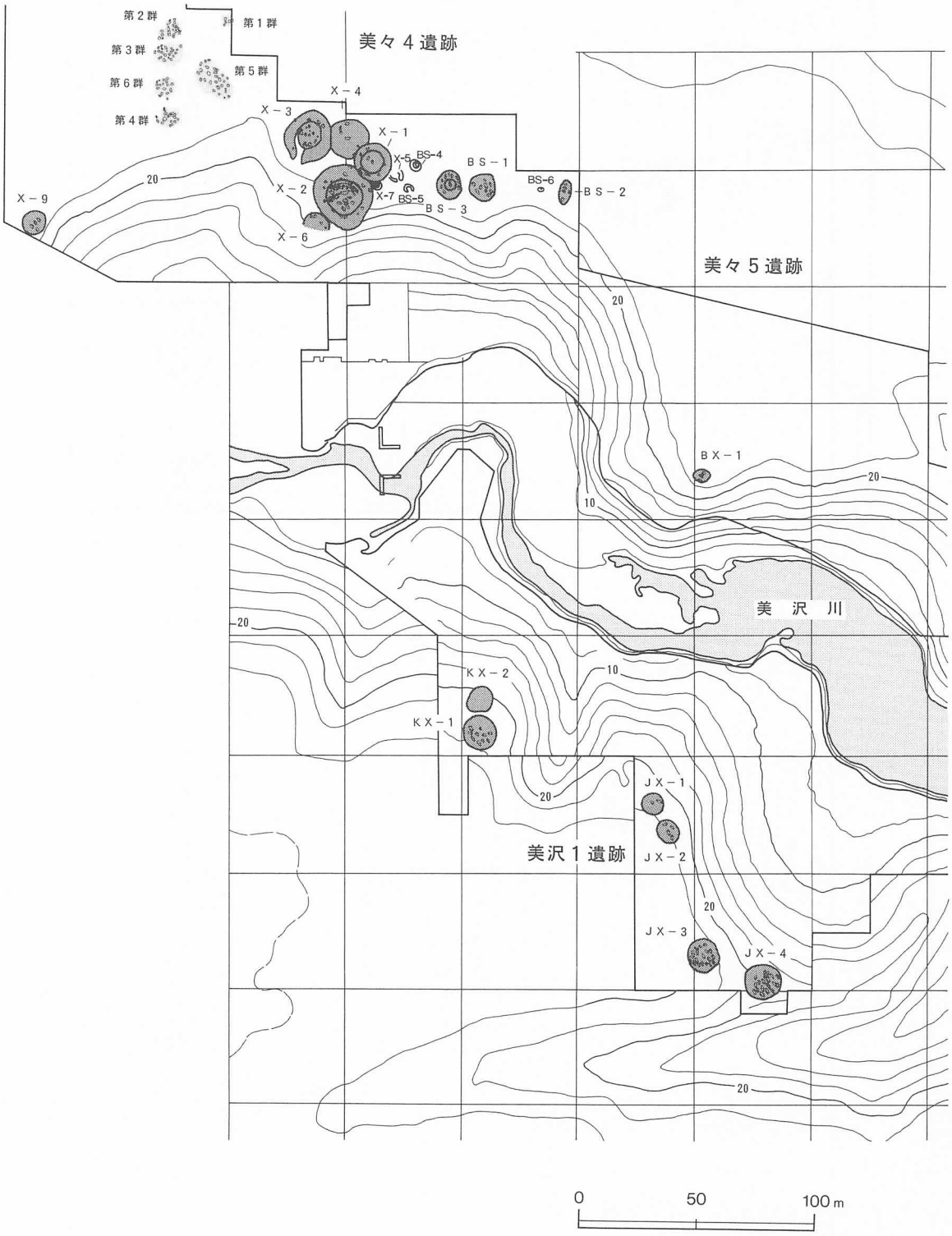
▲	積石墓	
25	静内御殿山墳墓群	静内町
26	ホロケ遺跡	三石町
27	緑丘遺跡	新冠町

▼	その他後期の墓壙	
28	北川遺跡（一区４遺跡）	端野町
29	上利別２０遺跡	足寄町
30	初田牛２０遺跡	根室市
31	小茂内遺跡	乙部町
32	釜谷２遺跡	戸井町
33	ピウカ２遺跡	美深町

図Ⅵ－２　北海道における周堤墓・配石遺構の分布



図Ⅵ－3　石狩低地帯における周堤墓の分布



図Ⅵ－４　美沢川流域の遺跡群における周堤墓の分布

表Ⅵ－２　周堤墓一覧

No.	所在地	遺跡名	略号	外径	内径	竪穴深さ	周堤幅	周堤高さ	平面形	墓壙数 竪穴内	墓壙数 周堤上	墓壙数 周堤外	時期	出入口	マウンド	備考	文献
1	苫小牧市	美沢1遺跡	JX－1	15.30 × 13.00	8.80 × 8.10	0.40	3.00 ～ 2.00	0.02	円形	2			堂林	あり		周堤を形成している状態ではない	美沢川流域の遺跡群Ⅲ
2	苫小牧市	美沢1遺跡	JX－2	14.00 × 13.30	9.00 × 8.70	0.20	2.00 ～ 1.00		円形	4			堂林	あり		周堤なし	美沢川流域の遺跡群Ⅲ
3	苫小牧市	美沢1遺跡	JX－3	26.00 × 22.50	13.20 × 12.30	0.82	5.50 ～ 4.00	0.30 ～ 0.20	円形	17			堂林～三ツ谷				美沢川流域の遺跡群Ⅲ
4	苫小牧市	美沢1遺跡	JX－4	25.50 × 23.40	14.40 × 14.20	2.00	5.60 ～ 8.40	0.65	円形	18			堂林～三ツ谷				美沢川流域の遺跡群Ⅲ
5	苫小牧市	美沢1遺跡	KX－1	25.40 × 22.50	12.35 × 11.80	0.26	4.00 ～ 3.50	0.10	円形	10			堂林～三ツ谷			周堤がKX－2に流れ込む	美沢川流域の遺跡群Ⅲ
6	苫小牧市	美沢1遺跡	KX－2		9.08 × 7.70	0.30			隅丸方形	0			堂林			未完成、周堤なし	美沢川流域の遺跡群Ⅲ
7	千歳市	美々4遺跡	BS－1		12.00 × 11.50	0.15		0.10	不整形	9			堂林			竪穴不明瞭	美沢川流域の遺跡群Ⅳ
8	千歳市	美々4遺跡	BS－2		11.60 × 9.70				長円形	4			堂林			竪穴立ち上がり確認できず、周堤なし	美沢川流域の遺跡群Ⅳ
9	千歳市	美々4遺跡	BS－3	20.00 × 18.50	12.00 × 10.60	0.50 ～ 0.30	4.00 ～ 2.00	0.20 ～ 0.10	円形	12	10		堂林	あり	1(5.5×5.5/0.4)	溝幅2.5～3.5、中央マウンド上に墓壙1基	美沢川流域の遺跡群Ⅳ
10	千歳市	美々4遺跡	X－1	16.40 × 16.10	9.65 × 9.20	0.45	3.30 ～ 2.80	0.20	円形	2			堂林	あり		X－2・4→X－1	美沢川流域の遺跡群Ⅶ
11	千歳市	美々4遺跡	X－2	29.00 × 26.50	15.90 × 15.60	1.30	6.70 ～ 3.60	0.60	円形	15	12		堂林	あり		X－2・4→X－1　他に竪穴内で周堤墓に伴わない墓壙7基	美沢川流域の遺跡群Ⅶ
12	千歳市	美々4遺跡	X－3	24.80 × 20.00	11.26 × 9.50	0.52	6.20 ～ 3.80	0.25	楕円形	7			堂林			X－4→X－3　　他に竪穴内で周堤墓に伴わない墓壙7基	美沢川流域の遺跡群Ⅶ
13	千歳市	美々4遺跡	X－4	18.00 × 17.00	11.00 × 10.00		3.50		円形	1			堂林			竪穴把握できず　X－2・4→X－1	美沢川流域の遺跡群Ⅶ
14	千歳市	美々4遺跡	X－6		11.00 × 10.00	0.42			円形	5			堂林			周堤不明、周堤墓ではない可能性あり　X－2→X－6	美沢川流域の遺跡群Ⅶ
15	千歳市	美々4遺跡	X－9		10.50 × 10.30	0.20	10.00	0.10	円形	5			堂林			周堤範囲不明瞭	美沢川流域の遺跡群Ⅸ
16	千歳市	美々5遺跡	BX－1		6.20 × 4.73	0.17			長円形	2			堂林			竪穴南壁不明瞭	美沢川流域の遺跡群Ⅲ
17	千歳市	末広遺跡	ⅡK－1	31.00	17.00	0.50 ～ 0.40	7.00	0.60 ～ 0.40	円形	9			堂林	あり	1(6.8×6.3/0.3)		末広遺跡における考古学的調査
18	千歳市	末広遺跡	ⅡK－2	25.00	15.00	0.20	5.00	0.17 ～ 0.10	円形	10	1		堂林		くぼみ1(1.2×1.1)		末広遺跡における考古学的調査
19	千歳市	末広遺跡	ⅡK－3	28.00	15.00	0.05	6.50	0.20	円形	*2*			堂林			全体の2分1以上調査	末広遺跡における考古学的調査
20	千歳市	丸子山遺跡	1号	26.00	17.00 × 15.00	0.60	6.70 ～ 5.50	0.50 ～ 0.30	円形	1			堂林	あり	1(5.6×5.0/1.5)		丸子山遺跡における考古学的調査
21	千歳市	丸子山遺跡	2号	18.00	13.00	0.25 ～ 0.20	4.00 ～ 2.70	0.15	円形	4			堂林	あり		2号→1号	丸子山遺跡における考古学的調査
22	恵庭市	柏木B遺跡	第1号	21.00 × 20.40	12.60 × 11.60	0.42 ～ 0.30	4.60 ～ 3.70	0.45 ～ 0.15	円形	21	18	5	三ツ谷	あり		1号→2号	柏木B遺跡
23	恵庭市	柏木B遺跡	第2号		9.68 × 8.76	0.25 ～ 0.15			円形	11			三ツ谷			周堤の広がり確認できず	柏木B遺跡
24	恵庭市	柏木B遺跡	第3号		11.64 × 11.16	0.10 ～ 0.05			円形	8			三ツ谷				柏木B遺跡
25	恵庭市	柏木B遺跡	第4号		12.20				不明	7			三ツ谷				柏木B遺跡
26	恵庭市	柏木B遺跡	第5号		12.20				不明	3			三ツ谷				柏木B遺跡
27	千歳市	キウス周堤墓群	1号	37.00 × 26.00	17.00 × 16.00	*2.00* ～	10.00		隅丸方形	*5*			堂林～三ツ谷	あり		竪穴部深さは内側と周堤頂部の比高差	大谷1978
28	千歳市	キウス周堤墓群	2号	75.00 × 65.00	32.00	*5.40* ～	21.50 ～ 16.50		円形	*7*			堂林～三ツ谷	あり		竪穴部深さは内側と周堤頂部の比高差	大谷1978
29	千歳市	キウス周堤墓群	3号	50.00	30.00	*0.90* ～	10.00		円形					あり		竪穴部深さは内側と周堤頂部の比高差	大谷1978
30	千歳市	キウス周堤墓群	4号	75.00	45.00	*2.60* ～	15.00		円形			1		あり		竪穴部深さは内側と周堤頂部の比高差	大谷1978
31	千歳市	キウス周堤墓群	5号	47.00	28.00 × 26.00	*1.00* ～	10.50 ～ 9.50		円形					あり		竪穴部深さは内側と周堤頂部の比高差	大谷1978
32	千歳市	キウス周堤墓群	6号	45.00	25.00 × 22.00	*0.90* ～	11.50 ～ 10.00		円形							竪穴部深さは内側と周堤頂部の比高差	大谷1978
33	千歳市	キウス周堤墓群	7号	45.00	28.00	*1.30* ～	8.50		円形	*1*						竪穴部深さは内側と周堤頂部の比高差	大谷1978
		キウス周堤墓群	8号													1998登録抹消、キウス4遺跡内に存在	
		キウス周堤墓群	9号													1998登録抹消、キウス4遺跡X－6に相当	
		キウス周堤墓群	10号													1998登録抹消、キウス4遺跡X－4に相当	
34	千歳市	キウス周堤墓群	11号	45.00	25.00	*0.70* ～	10.00		円形					あり		竪穴部深さは内側と周堤頂部の比高差	大谷1978
35	千歳市	キウス周堤墓群	12号	30.00	16.00	*0.50* ～	7.00		円形					あり		竪穴部深さは内側と周堤頂部の比高差	大谷1978
36	千歳市	キウス周堤墓群	13号		25.00				円形							竪穴部深さは内側と周堤頂部の比高差	大谷1978
37	千歳市	キウス4遺跡	X－1	32.00	19.00	0.50	6.50	0.20	円形	*1*			堂林		1(6.0×6.0/0.20～0.1)	周堤頂部削平	キウス4遺跡
38	千歳市	キウス4遺跡	X－2	31.00	19.00	*0.70*	6.00	0.20	円形				堂林			竪穴部深さは内側Ⅰ黒層上面と周堤頂部、周堤高さは外側との比高差	キウス4遺跡
39	千歳市	キウス4遺跡	X－3	19.00	10.00	*0.60*	4.50	0.40	円形				堂林			竪穴部深さは内側Ⅰ黒層上面と周堤頂部、周堤高さは外側との比高差	キウス4遺跡
40	千歳市	キウス4遺跡	X－4	41.00	27.00	0.62 ～ 0.35	7.00	0.30 ～ 0.10	円形	*9*			堂林		2(6.0×6.0/0.3、5.0×4.5/0.2)	周堤頂部削平	キウス4遺跡
41	千歳市	キウス4遺跡	X－5	20.00	14.00	0.30	3.00	0.20	円形				堂林			周堤頂部削平	キウス4遺跡
42	千歳市	キウス4遺跡	X－6	28.00	17.00	0.35 ～ 0.27	5.50	0.20	円形				堂林			周堤頂部削平	キウス4遺跡
43	千歳市	キウス4遺跡	X－7	20.00	13.00	0.40 ～ 0.20	3.50	0.20	円形				堂林			周堤頂部削平	キウス4遺跡
44	千歳市	キウス4遺跡	X－10	23.38 × 23.16	16.56 × 15.16	0.31 ～ 0.25	3.56 ～ 3.18	0.31	円形	14			堂林		1(2.8×2.8/0.15)		本報告書
45	千歳市	キウス4遺跡	X－11	20.45	12.56	0.38 ～ 0.14	3.84 ～ 3.04	0.14	円形	*1*			堂林	あり	1(6.0×6.0/0.05)	X－12→X－11	本報告書
46	千歳市	キウス4遺跡	X－12	13.92 × 13.28	8.64 × 8.00	0.24 ～ 0.16	2.80 ～ 2.40	0.16	円形	2			堂林			X－12→X－11、X－12→直線状盛土	本報告書
47	千歳市	キウス4遺跡	X－13	11.48 × 10.44	6.89 × 6.48	0.20 ～ 0.10	2.42 ～ 1.86	0.00	円形	1			堂林			X－13→X－11	本報告書
48	千歳市	キウス4遺跡	X－14	10.08	6.00	0.10	2.30 ～ 2.00	0.00	円形	1			堂林				本報告書
49	千歳市	キウス4遺跡	X－15	10.84 × 9.84	6.04 × 5.40	0.07	2.52 ～ 1.92	0.07	円形	3			堂林				本報告書
50	千歳市	キウス4遺跡	X－16	8.50	5.50				円形				堂林				本報告書
51	千歳市	キウス4遺跡	X－17	17.82 × 16.25	9.44 × 8.68	0.48 ～ 0.26	3.88 ～ 2.92	0.15	円形	5			堂林	あり	1(5.0×5.0/0.18)		本報告書
52	千歳市	キウス4遺跡	X－a	28.50 × 25.00	16.50 × 15.50	0.26 ～ 0.11	8.60 ～ 3.70	0.46 ～ 0.30	円形				堂林			竪穴部深さは内側と、周堤部高さは外側と周堤頂部との比高差	本報告書
53	千歳市	キウス4遺跡	X－b	33.80 × 32.50	17.90 × 15.80	0.26 ～ 0.00	10.60 ～ 7.00	0.28 ～ 0.17	円形				堂林			竪穴部深さは内側と、周堤部高さは外側と周堤頂部との比高差	本報告書
54	千歳市	キウス4遺跡	X－c	27.50? × 18.50	10.00 × 8.90	～	8.80 ～ 4.00		円形				堂林				本報告書
55	千歳市	キウス4遺跡	X－d	25.00	16.00				円形				堂林				本報告書
56	千歳市	キウス4遺跡	X－α		10.00				不明	4			堂林				本報告書
	千歳市	キウス4遺跡	X－β		9.00				不明	2			堂林				本報告書
57	芦別市	野花南環状土壇		21.00	17.00	0.40 ～ 0.30	2.00	0.50	円形	3			堂林				新芦別市史
	芦別市	野花南環状土壇	?		11.30	0.05			円形	1			?				滝里遺跡群Ⅸ
58	斜里町	朱円環状土壇	A号	28.00 × 27.00	22.00 × 21.00				円形	*20*			御殿山				斜里町史、河野広道ノート1981
59	斜里町	朱円環状土壇	B号	44.48 × 41.60	27.10 × 22.38	0.66 ～ 0.45	12.10 ～ 6.70		円形	1			御殿山			竪穴部深さは床面と周堤頂部の比高差	斜里町史、河野広道ノート1981
60	標津町	伊茶仁ふ化場1遺跡		31.50 × 27.50	20.00	0.30	8.00 ～ 3.00	0.20	円形	*2*			堂林	あり			標津の竪穴Ⅱ
61	標津町	伊茶仁チシネ第3遺跡	1号	18.00	10.80	～ *0.30*	4.00	0.49 ～ 0.30	方形?							竪穴部深さは内側と、周堤部高さは外側と周堤頂部との比高差	標津の竪穴Ⅷ
62	標津町	伊茶仁チシネ第3遺跡	2号	20.00	11.60 × 9.20	～ *0.30*	5.00	0.39 ～ 0.30	円形							竪穴部深さは内側と、周堤部高さは外側と周堤頂部との比高差	標津の竪穴Ⅷ
63	標津町	伊茶仁チシネ第3遺跡	3号	31.00 × 21.00	23.60 × 15.20	*0.40* ～ *0.20*	6.00 ～ 4.00	0.50 ～ 0.00	楕円形					あり		竪穴部深さは内側と、周堤部高さは外側と周堤頂部との比高差	標津の竪穴Ⅷ
64	標津町	伊茶仁チシネ第3遺跡	4号	18.00 × 17.00	12.00	0.20	3.00 ～ 2.50	0.60 ～ 0.25	円形	*3*			堂林			周堤部高さは外側と周堤頂部との比高差	標津の竪穴Ⅷ、植田1999
65	標津町	伊茶仁チシネ第3遺跡	5号	15.00	16.00 × 6.00	*0.40* ～ *0.30*	7.00 ～ 5.00	0.60 ～ 0.10	円形							竪穴部深さは内側と、周堤部高さは外側と周堤頂部との比高差	標津の竪穴Ⅷ
66	標津町	伊茶仁カリカリウス遺跡	無名川	17.00	10.50	*0.40* ～ *0.10*	3.50 ～ 2.00		楕円形								植田1996
	標津町	伊茶仁カリカリウス遺跡	カリカリウス川		10.00				円形								植田1996
	標津町	伊茶仁カリカリウス遺跡	カリカリウス川		10.00				円形								植田1996

※「竪穴深さ」での斜数字は、竪穴床面から周堤頂部までの比高差。※「墓壙数」での斜数字は全掘していないため、まだ増える可能性のある数。

3 キウス4遺跡・キウス周堤墓群における周堤墓の分類と新旧関係

1 周堤墓の分類

周堤墓を主にその規模を中心として分類してみる。

キウス4遺跡および国指定史跡キウス周堤墓群の周堤墓の規模をあらわしたものが図Ⅳ－5である。規模から大きく5群（小さくは7群）に分かれる。それぞれの群には4～5基の周堤墓がまとまる。

第1群　キウス4遺跡X－12・13・14・15・16

外径は10m前後で内径は6～7m、掘り込みは10m前後と浅く周堤は見られないか、かなり不明瞭であるもの。したがって、出入口も確認できない。マウンドはなく、竪穴内遺物もほとんどない。

墓壙数は1～3基である。平面形は長軸長が200cm近い長いものと100cmほどの短いもの[注1)]が混在しており、いずれも幅が狭い（図Ⅵ－10）のが特徴である。墓標はX－15でのみ確認された。墓壙にベンガラは無く、副葬品もほとんど無い。墓壙の長軸方向はN64～81°Wで、他の同一周堤墓内よりもまとまりが良い。

墓標・副葬品の有無によりa・b類に細分できる。

1群a類　墓標・副葬品のないもの　X－12・13・14

墓壙数は1～2基である。

1群b類　墓標・副葬品のあるもの　X－15

墓壙数は3基で、墓標と思われる木柱痕は墓壙内にある。副葬品は1基から漆器が検出された。また埋土は上部がローム、下部がパミス主体で明瞭に分離しており、壁面に見られる基本層序と深さに対応している。

第2群　キウス4遺跡X－3・5・7・11・17・c

外径は20m前後で内径は約10～14m、竪穴の深さは30cm・盛土厚は20cmほどであるもの。周堤は高まりが感じられる程度であるが、出入口は確認できる。マウンドがあるものもある。竪穴内の遺物は少ないが、小型鉢が出土した例もある。

墓壙数は全掘したX－17から5基程度であると推測される。長軸は全て出入口に向かっており、そのため長軸方向のブレが生じている。

本群は墓壙の形状、墓標の有無、ベンガラ・副葬品の有無などは周堤墓により若干様相が異なる。

X－17の墓壙は丸みが強く、長軸長が短い。ベンガラは壙底と埋土中の2回散布され、副葬品も多く、石鏃・石斧・ひすい玉がある。

一方のX－11の墓壙は細長く、墓標は長軸両端に木柱痕がある。また、埋土上部を突き固めている可能性がある。竪穴から小型鉢の土器片が出土し、復元できた。

なお、X－αは墓壙数が4基で、墓壙の規模、配列、墓標の在り方などから本群に分類されると思われる。

第3群　キウス4遺跡X－1・2・6・10・a・b・d、キウス周堤墓群1号・12号

内径が16～19mで、竪穴はしっかりと掘り込まれ、周堤も明瞭で、出入口も確認できるもの。外径は23～37mとばらつきがあり、他の群と比べてグラフ上で散在するが、内径のまとまりから一群として把握できると思われる。また、竪穴内からは、小型鉢の他に注口土器も出土し、一部には石器も見

られる。また、マウンドがあるものもある。

墓壙数はその規模から10基以上になると思われる。墓壙は長いものと短いものが混在するが、合葬墓を除くと幅が広くなり、長軸長も若干短くなり、丸みを帯びる傾向がある（図Ⅵ－10）。床面にベンガラが確認される墓壙は約半数と多く、副葬品は少ない。木柱の墓標は長い墓壙だけではなく、丸い墓壙にもみられるようになる。また、壙口内に石柱がある例もある。

外径や石柱の墓標の存在、竪穴内遺物から２小群に分けることができる。

３群ａ類　外径が30m以下で、墓標が木柱のもの

キウス４遺跡Ｘ－６・10・ａ・ｄ、キウス周堤墓群12号

Ｘ－10の竪穴内からは墓壙の壙口部を中心に注口土器・小型鉢形土器が出土し、**Ｘ－６**でも深鉢形土器が２個体確認された。墓標は長軸両端もしくは一端にあるもの９基と多く、ベンガラも半数以上の墓壙にみられた。また、壙口部を粘土で突き固めている墓壙があった。長軸方向は北西を中心にばらつく傾向がある。

３群ｂ類　外径30m以上で、墓標に石柱が使われる墓壙があるもの

Ｘ－１・２・ｂ、キウス周堤墓群１号

キウス１号では竪穴内から土器のほかに石鏃も出土した。墓壙は長軸長が短くなり、更に丸みを帯びる。墓標には立石も使用され、**Ｘ－１・キウス１号**では墓壙内にあった。また、砂岩の偏平礫が壙口部に置かれていた例もある。**Ｘ－１**マウンド上の墓壙は床面にベンガラが撒かれており、副葬品はなく、埋め土上部はａ類と同様に固くなっていた。

第４群　キウス４遺跡Ｘ－４、キウス周堤墓群３・５・６・７・11号

外径41～50m、内径25～30mで竪穴と周堤上部との比高差は１ｍほどもあり周堤がかなり顕在化するもの。そのため出入口はより明瞭となっている。竪穴内の遺物は少ないが３群ｂ類同様石器も出土し、**Ｘ－４**でスクレイパーが確認された。マウンドは**Ｘ－４**で複数あった。

墓壙数はトレンチ調査の**Ｘ－４**で８基程が確認されており、その密度から10基以上で20基ほどの存在が想定される。規模は最も長軸長が大きいものでも1.5m程と短くなっている。墓標には**Ｘ－４**、**７号**のように立石も見られるが、その位置は３群とは異なり墓壙外にもみられるようになる。また、墓標に関係するかと思われる小土壙が同じく**Ｘ－４**の墓壙外にあった。副葬品は不明である。

第５群　キウス周堤墓群２・４号

外径75m、内径32～45m以上と巨大なもの。**２号**の床面から周堤頂部までの比高差は5.4mもある。２基ともに出入口がある。竪穴内からは**２号**で土偶・石鏃・ベンガラの付着した石皿が出土しており、最もバラエティに富んでいる。

墓壙は**２号**で１基が確認された。平面形は円形に近く、墓壙の周辺に偏平礫８個が配置されていた。ベンガラが床面にあり、石鏃が副葬されていた。

２　キウス４遺跡における周堤墓の編年

①　重複関係

本報告に記載されているように、平成９年度の調査において周堤墓が重複して発見された。このうち、新旧関係が明らかなのは、**Ｘ－12→Ｘ－11**、**Ｘ－13→Ｘ－11**、**Ｘ－12→直線状盛土**、**Ｘ－10→直線状盛土**である。また**直線状盛土**は**Ｘ－10**構築直後に作られたと考えられることから、**Ｘ－10**のほう